石井次郎について

島田 顕

戦後直後のモスクワ放送日本語課を支えた人物の中に、異色の経歴を持つ者がいる。石井次郎である。川越史郎、木村慶一の著書にも登場する人物だ。彼が医者だったことは周知の事実である。しかしながら、彼がなぜソ連にやってきたのかについては、これまでわからなかった。モスクワのルガスピ文書館に、わずか二枚の彼の個人ファイル史料があり、閲覧することができた。

それによると石井は、1910年東京生まれ、無党派、高等教育［終了］、軍務経験なし、教育上の専門は医学、日本語・ロシア語は堪能である。東京の東京［慈恵会］医科大学を卒業後、1934年から40年まで同大学病院助手となる。おそらく卒業直後から勤務を開始したのだろう。その後1941年から、東京の私立診療所の医師、府中市の電気会社「芝浦」［東芝］の医師、東京市立病院外科の外科医と転々としている。また既婚と書かれているがいつ結婚したのか、妻子がどこにいたのかは不明だ。「1943年に日本からソ連に自分の意志でやって来た」。さらに「1943年から44年までサハリン［北樺太］のドゥエにおける日本の石炭利権企業［勤務］」とあるので、石炭利権企業関連施設の勤務医として赴任したのだろう。日本の医科大学の医局制度によって派遣されたのではないだろうか。

1944年から45年までハバロフスク市のタス通信ハバロフスク州支部日本語翻訳者となり、1945年から47年まで同支部調査員となっている。戦中のモスクワ放送の日本語番組は1942年にモスクワから放送開始された。ハバロフスク局からの日本語放送は1946年に開始される。同支部がどのような業務を行っていたのかは詳しくはわかっていないが、おそらく情報収集のための組織だったのだろう。またこの組織は1944年に、東一夫（ロシア語教育者でミール学院創立者）が中心となり、モスクワからの日本語放送のモニタリング調査を行ったことがわかっている。

1946年よりハバロフスクからの日本語放送が開始され、石井も翻訳者として従事することとなる。さらに1949年にモスクワ局に赴任する。モスクワ市のソ連閣僚会議附属全連邦ラジオ放送委員会の日本向けラジオ放送編集部、つまりモスクワ放送局日本語課の翻訳者となる。

石井の個人ファイル史料の日付は、1950年9月12日と1951年6月9日のみであり、それ以降の記録がない。川越によれば、1961年の時点で石井はモスクワで健在だった。しかしながら、同じくモスクワ放送に勤務した滝口新太郎、赤沼弘らのことはいつ亡くなったのかもわかっているのに、石井のことはわかっていない。だがロシアで人生を終えた可能性は高いだろう。また医師として勤めていたのになぜソ連に移ったのか。1944年からハバロフスクで働き始めているので、いわゆる「抑留」ではないことは確かである。石井にまつわる疑問は多い。これらの疑問を解き明かすために、近々彼の出身大学である慈恵医科大に当たってみようと思っている。おそらく何らかの記録があることを期待して。

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております